

緊急特集

新型コロナウイルス感染症の 拡大と私たち

新型コロナウイルス感染症の拡大により多くの人々の命が脅かされています。それに加え、障害のある人々を取り巻く環境には、深刻な影響が現れています。

ある肢体不自由の支援学校に勤める先生の話です。

「2月末に休校要請が出されたときは、『来週で子どもたちに会えなくなるの?』と困惑しながら休校に向けての準備で現場は大わらわでした。休校中も希望する子どもたちは『預かり』という形で受け入れましたが、基礎疾患をもっている子どももいるなかで、『自分が子どもたちに感染させてしまうのではないが』という不安がいつもありました。でも、常時介助が必要な子どもが一日家にいることを考えると、お母さんのためにも子どものためにも学校に来させてあげたい、少しでも支えになりたいと強く思います。一方で、自分にも家庭があるけど、朝いつもと変わらない時間に電車に乗って通勤しなければならない…。そんな状況に矛盾を感じる日々でした。緊急事態宣言が出されてから2週間、教員も在宅勤務が進み、学校に来ている子どももとて少なくなりました。感染のリスクを下げるためには仕方がないと思いますが、家にいる子どもたちの生活がどうなっているかとても心配です」。

また、別の学校の先生はこう話します。

「4月になり、毎日ではないけれどもやっと子どもたちと会える、そう思っていた時に緊急事態宣言によって休校が延長されました。年度が変わり、担任も変わりました。新しく担任になった子どもたちのことをよく知らないまま、毎日どのように過ごしているか、何か困っていることがないかとお家に電話をかける日々が続いています。先日、あるお母さんと電話で話していたら『担任が変わったばかりなのに、うちの子のことで先生を困らしたら悪いと思っていました』と言われました。お母さんの、不安なのにその気持ちを抑え込んでいたということに胸が締めつけられる思いでした」。

二人の学校の先生の話ですが、これは教育現場に限った話ではありません。いま、すべての人が感染症の恐怖と、それによって日常生活が変わったことに不安になり、限られた条件のなかで日々をやり過ごさなければならない矛盾に葛藤を抱えて過ごしています。また、新型コロナウイルス感染症にかかった人や、医療現場をはじめとした日々感染症に立ち向かっている人たちに対するバッシングや誹謗中傷といった差別や偏見も深刻です。

今回、臨時特集という形をとり、障害のある人やその家族、関係者の方々、さまざまな立場の人から今の生活や仕事、思っていることを寄せていただきました。

全障研は各自の立場を越えて、だれもが平等になんでも語り合い、学びあうことを大切にしています。困難な状況のなかでは、障害のある人、家族、教職員、福祉現場ではたらく人など立場やいま直面している課題がちがうことで、互いの状況が見えず、手をつなぎあうことがむずかしくなるかもしれません。だからこそ、命と毎日の生活に不安を抱えながらひとり悩む、そんな「ひとりぼっち」をつくらないためにも『みんなのねがい』でつながることができたらと思います。

いま、医療や福祉の現場で起きている困難な状況は、命と生活を軽視する現在の社会保障政策がもたらした結果であることを鮮明に表しています。新型コロナウイルス感染症の拡大と、その影響による命の危機と生活の困難は、個人や家族の力だけで防げるものでも、乗り越えられるものでもありません。

『みんなのねがい』を通じて、「命と生活を大切に」そんな当たり前の社会の形を立場や職種などのいろいろなねがいをこえて、たくさんの人たちとつながって、それぞれの思いを大切にしながら一緒に考え続けていきたいと思っています。

緊急特集 新型コロナウイルス感染症の拡大と私たち

- 2 現場はいま 各地からの声
- 10 日本型社会保障はコロナ禍で機能しているのか 芝田英昭
- 12 出会いはタカラモノ 子どもから教えられたことばかり 佐藤比呂二
- 16 みんなのスポーツ 高橋正樹 / BOOK
- 17 人として 村山由布
- 18 【インタビュー】いま、あなたに伝えたい 田中優子
- 20 子育ては誰もが“若葉マーク” 近藤直子
- 22 【グラビア】写真が刻む時 土佐和史
- 24 ニュースナビ 障害をもつ人の参政権 児嶋芳郎
- 26 わたしの教材・教具 木下博美

特集 知ろう語ろう 北海道に暮らす仲間たち

- 27 一人ひとりが小さな一歩を踏み出すきっかけに 前田 哲
- 30 旭川が呼んでいる 二通 諭
- 32 「おかえり」からはじまる寄宿舎教育の魅力を再発見 熊谷幸喜
- 35 グループホームでゆたかに暮らす 西 竜之介
- 38 ようこそ旭川へ! 安藤路恵
- 39 この子と歩む 中村抄理
- 42 高齢期を迎えた障害者と家族 老いる権利の確立をめざして 田中智子
- 46 気づきからはじまる子ども理解 土岐邦彦
- 48 障害者権利条約の最前線 佐竹葉子
- 50 実践の魅力 市橋博子
- 53 みんなのひろば
- 55 編集後記

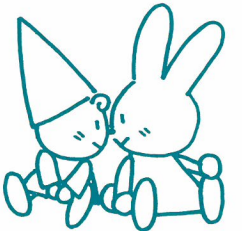
裏表紙 NEGAI GALLERY

表紙のことば

熊本県阿蘇市で農家を営む岡田留里子さん。2016年4月に熊本地震の被害を受け、次の出荷に再起をかけていた矢先に、阿蘇山の噴火が起きた。火山灰を浴びたイチゴの葉は、焼けたように真っ黒だった。それでも地道な復旧作業を続け、次の春には念願の再出荷にこぎつけた。「自然は怖い。でもそれ以上の恩恵を私たちにくれるの」。留里子さんの手の中で輝くつやつやとしたイチゴの実は、自然と人間が同じ空間を分かち合いながら育んできたこの地の宝物だった。孫のひなたちゃんは、そんな大粒のイチゴが大好きだそう。

みんなの ねがい

2020年7月号
No.652



デザイン・イラスト
うじたなおき、齋藤 知
橋野桃子、本村 蓮



表紙=安田菜津紀

やすだ なつぎ / 1987年神奈川県生まれ。Dialogue for People所属フォトジャーナリスト。東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や貧困、災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録。著書に『写真で伝える仕事-世界の子どもたちと向き合って』(日本写真企画)、他。